

茅吹手



国道381号を大正から旧十和村方面へ。浦越トンネルを抜け1kmほど行くと長い直線に入る。この辺りから茅吹手の集落が始まる。国道沿いに数軒の民家があり、国道からは見えないが、右上の山の斜面にも数軒。さらに、沈下橋の周辺に数軒。地区の方のお話によると、沈下橋周辺が茅吹手村の「本村」にあたり、現在国道沿いにある集落は小字名を「屋式(↓屋敷)」といったそうである。したがって、地区の産土神である河内神社は、沈下橋の近くにある。この河内神社、その

昔は、今の場所ではなく、四万十川の近くにあった。四万十川に「新谷」という小流が注いでいて、その合流地点辺り。それが明治23年の大水害で流されてしまったので、現在の場所に建て直した。ちなみに、茅吹手沈下橋の正式名は「新谷橋(しんたにばし)」という。この小流の名がついている。「しんたに」は、地元の人には「にや(にいや)」とも言そうだ。

沈下橋ができる前は、人々は渡し舟で往来した。他の地区を見てみると、舟番は地区民による当番制で行っている場合がほとんどであったが、茅吹手では、基本的には舟番は置かれず、各自、自前の舟で渡ることが多かったそうである。これは、この地区は、昔から火振り漁が盛んで、ほとんどの人が舟を持っていたからなのだと、地区の方が教えてくれた。

茅吹手という地名の由来についてはわからない。手がかりとなるのが、地区の四万十川南岸の山の上に、まとまった面積を有する茅場があったこと。まだ茅葺の家が多かった時代、その茅場で刈り取られた茅が、近隣の村々でも使われたという。戦国期の地検帳にはすでにカヤフクテとの記載があるようである。

さて近年の話。まだ予土線が開通していない頃、主な交通手段は国鉄バス。茅吹手の人たちも、通勤通学でこれを利用していただが、昭和地区と大正



茅吹手沈下橋。正式名は新谷橋。四万十川中流を代表する風景である。

地区の間にあるため、茅吹手から乗車するときにはいつも超満員！特に雨の日などは、普段は自転車と通学している高校生たちがこぞって利用することもあって、積み残しは当たり前だったという。積み残された高校生たちはどうするかというと、バスの後からやって来る、教員の自家用車に乗せてもらっていたのだそう。当時の教員たちも心得たもので、積み残しの子どもたちはいないか、気をつけながら運転していたのである。

ところで、茅吹手村・浦越村・いづれご紹介する轟村の三村は「平櫛(串)村」という名の村の一部であったという記述が見られる。この平櫛村という村は、現在の地区割りで見たときにどこからどこまでを指すのか、はっきりとはわからないが、古い文献などにはその名は明記されていて、十和村史などにも頻りに登場するので、存在していたことは間違いない。

どの地区もそうであるように、茅吹手も人口は減っているが、毎年欠かさないお祭りがいくつかある。そのひとつ「地藏まつり」では、今も餅投げが行なわれる。地区の方によると、昔は地藏祭り、相撲をとらされたそうである。



町のうごき

(2月28日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,512	-11	男 0	17	15	9
女	8,174	-13	女 4	15	17	19
計	15,686	-24	計 4	32	32	28
世帯数	8,113	-7	(2月中の届出)			
窪川地域	11,143人		大正地域	2,176人	十和地域	2,367人